

石井 祐子 (芸術学)

生成と展示をめぐるコラージュ

—1920年代から40年代初頭におけるマックス・エルンストのコラージュの展開

論文審査の結果の要旨

上記の論文は、シュルレアリスムを代表する画家の一人、マックス・エルンスト(1891-1976)のコラージュを、シュルレアリスムの絵画論の形成過程や彼を取り巻くコンテキストの変化の中に置き入れ、その意義や美術史上の位置付けの再考を試みたものである。とりわけ、単に作品の様式や受容の変化を辿るだけでなく、作品の展示のあり方をも関連付けてエルンストのコラージュの変遷を論じていることが、従来の研究にない新しい視点を盛り込もうとした点であると言える。

1920年代初頭から30年代半ばに掛けて、エルンストの制作や展覧会への出品の傾向はシュルレアリスムの絵画に関する言説に大きな影響を受けていると本論文は指摘する。シュルレアリスムの絵画の存在可能性が疑義に晒された1920年代半ば、シュルレアリスム運動を主導していたアンドレ・ブルトンが弁証法的な絵画論を展開し、固定的なイメージではなく動的な生成のプロセスを重要視した。当初、シュルレアリスム絵画の理論的源泉となったのはエルンストではなくピカソであった。議論の深まりの過程で「コラージュ」や「デペイズマン」の概念が次第に形成されていくが、未だ定まらぬシュルレアリスムにおけるコラージュの意義に呼応して、特に1920年代後半に掛けてエルンストの技法が多様化し、コラージュ作品の出品が減少していくという分析は大変興味深い。

1930年代に入ると、ルイ・アラゴンの包括的なコラージュ論をきっかけに、エルンストのコラージュがシュルレアリスムの絵画を代表するものになり、再び展覧会への出品が増加していく。アラゴンはブルトンと異なり、エルンストの幻視の結果を固定化したコラージュ作品から動的に意味が生成されることを認めたが、本論文では、この時期に制作されたコラージュ・ロマン三部作が採用した書物という形態の中に、アラゴンの主張との相関関係やコラージュ概念の拡張の兆しを読み取っていく。そして1930年代の議論は、最終的にコラージュの概念を制作技法から作品展示の方法へと拡張することになったと本論文は主張する。1936年にロンドンで開催された国際シュルレアリスム展を、サロン風の展示からシュルレアリスムの並置への転換点とみなし、展覧会実行委員会の議事録等の分析に基づくシュルレアリスムの展示方法形成の指摘は特に重要なものである。

そして、第二次世界大戦によってアメリカ亡命を余儀なくされた1943年に、トロンプ・ルイユの木枠の中に過去の自己の作品からの引用を描くという特異な画面構成で制作された《Vox Angelica》を、コラージュ概念の形成・深化・拡張という過程の先にあるものだと本論文は位置づける。亡命期のエルンストの代表作の一つでありながら従来主題的に研究されることの少なかった本作は、自己を素材としてコラージュの出発点を展示する新しい形のコラージュ作品とみなされる。そのような指摘から、抽象の流れや消費社会の中でシュルレアリスムが歴史的に相対化され、エルンスト自身が異国に身を置く状況と、現実の矛盾を越えた超現実を表現しようとするコラージュの理念の交差する点に本作が成立する、という本作の意味に関する新しい解釈へと繋がっている。

以上の様な議論を裏付けるため、本論文はロンドン国際シュルレアリスム展の議事録等の未公刊史料の調査や、膨大な出品作品のデータの作成・分析等、緻密かつ実証的な研究手法を実践している。それに基づいた議論の成果は極めて説得力の高いものになっていると同時に、エルンスト研究において重要な意義を持つものと評価することが出来るだろう。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)を授与されるのに十分な能力を持つことを認めるものである。